

<巻頭言>

日本の精神保健と福祉の課題と展望

長谷川敏彦

国立保健医療科学院政策科学部長

国立保健医療科学院が創設されて、2年の歳月が流れた。新科学院は、旧国立医療・病院管理研究所と旧国立公衆衛生院の学統の上に設立され、「科学的根拠に基づく保健医療政策（Evidence Based Health Care Policy）を支えるための研究」と、「保健医療福祉分野における統合的な研究や人材の育成」を新たな使命として出発した。

しかし、その活動内容は、外部の研究者にはもとより、科学院内部にさえ十分に周知されていない。また二つの伝統を生かして新たなあり方を模索する必要にも迫られている。そこで、創設後9ヶ月を経て、内外の研究者と交流し、共に新しい伝統の確立を模索するため、保健医療福祉セミナーを開催するはこびとなった。セミナーでは、できるだけ多くの内部の研究者に、これまでの成果を発表してもらい、また外部からの研究者もお招きし、聴衆も広く外部に参加を呼びかけ、熱のこもった討論となることを目指している。

第1回は、2002年1月17日（金）の午後に開かれ、テーマとして「精神保健行政の諸課題」が選ばれた。精神保健行政は、保健（予防）、医療（治療）、福祉（介護）の3つの側面をもち、複雑に関係し、これまで長い行政の歴史を負ってきている。新生科学院の今後を模索する上で最初に取り上げるテーマとしては、きわめて興味深く適切なテーマと考えられる。雑誌「保健医療科学」は、かつての公衆衛生院の機関誌「公衆衛生研究」が科学院の設立とともに、雑誌名を変更したもので、これも内外の研究者との研究交流を目的としている。

そこで本号は今日の精神保健行政の諸課題を特集した。内容は、第1回の保健医療福祉セミナーの発表内容を核としている。例えば、長谷川による冒頭の論文は、セミナーの基調講演の内容である。本号の各論文の筆者には、セミナーでの発表を元に、さらにそこでの討論の内容を加えてまとめたいただいた。精神保健分野での最近の重要な二つの調査について、630調査は国立精神・神経センター精神保健研究所の竹島正部長に、また、ニーズ調査は慶応大学の山内慶太助教授に原稿をお願いした。科学院の内外の研究者、行政の視点、そして調査データによる現状の分析など、精神保健に携わる研究者・実践家の諸氏には本号が貴重で便利で総合的な資料となりうると自負している。

本号が精神保健福祉行政の発展に資すること、その結果、精神疾患・障害を抱えた多くの人々の福祉に貢献することを祈ってやまない。

なお、第1回保健医療福祉セミナーの内容は表のとおりであった。

表 第1回保健医療福祉セミナープログラム

		司会：小山秀夫（国立保健医療科学院経営科学部）
13：30～	開会の辞：小林秀資院長	
13：35～14：15	基調講演「日本医療の最後の暗部に光を」	長谷川敏彦（国立保健医療科学院政策科学部）
14：15～16：25	テーマごとの発表、講演	
1.	「精神保健の疫学－在院日数、退院率など」	藤田利治（国立保健医療科学院疫学部）
2.	「精神科医療における医療の質の向上の観点から」	瀬戸屋雄太郎、伊藤弘人（国立保健医療科学院経営科学部）
3.	「精神障害者の精神リハビリテーション」	守田孝恵（国立保健医療科学院公衆衛生看護部）
4.	「精神保健福祉行政からのコメント」	松本義幸 課長（厚生労働省精神保健福祉課）
5.	「施設の観点から」	寛敦夫（国立保健医療科学院施設科学部）
6.	「触法精神障害者処遇について」	武井満（群馬県精神保健福祉センター）
16：25～17：25	パネルディスカッション	
17：25～	閉会の辞：林謙治次長	
17：30	閉会	